The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	授業研究 参加型授業の可能性を求めて
Author(s)	嶋本, 隆光
Citation	大阪外国語大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2006, 4, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12353
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

授業研究　参加型授業の可能性を求めて

嶋本　隆光

【要旨】

効果的な授業は、理論的知識と実践的知識のバランスがとれたものである。理論的知識と実践的知識が程よいバランスを保つときに、学習者の学習意欲は増大するであろう。一般に理論的知識は書物など文書を中心に獲得され、実践的知識は旅行や実地見学などによって得られる。本授業研究では、具体的に筆者が担当している日本語日本文化研修留学生向き「大阪の勉強しょうか」ならびに学部留学生向き「日本史」の授業を具体例として取り上げ、参加型授業の可能性についてこれまで考えてきたこと、実践してきたことを紹介検討したい。

[はじめに]

> さう云う訳で、言語は非常に便利なものでありますが、しかし人間が心に思っていることなら何でも言語で現せる、言語を以って表白出来ない思想や感情はない、という風に考えたら間違ひであります。今も云ふやうに、泣いたり、笑ったり、叫んだりする方が、却ってその時の気持にぴったり当て嵌まる場合がある。黙ってさめざめと涙を流している方が、くどくど言葉を費すよりも千万無量の思ひを伝える。もっと簡単な例を挙げますと、鯛を食べたことのない人に鯛の味を分からせるやうに説明しろと云ったらば、皆さんはどんな言葉を択びますか。恐らくどんな言葉を以ても云ひ現はす方法がないでありませう[1)]。

このように谷崎が述べているのは、もちろん体験の重要性ではなく、むしろ彼の関心は、文章の力の限界である。鯛の味を文章で表現することはほぼ不可能であって、文章家はこの明白な事実をまず認める必要があるというのである。筆者の関心は谷崎のそれとは全く異なったところにある。つまり、文章の力云々というような高尚な話ではなく、鯛の味が分からなければ食べればよいではないか、という話である。さらに、鯛はどのように食べるのが良いか、という話である。

人間の認識能力についての議論は、西洋では17－8世紀頃から熱心に行われてきた。デカルト（1596－1650）は人間が真理に到達する手段として五感を媒介とする限り到底明晰かつ確実な真理にいたることはできないと考えた。これはなるほどもっともな議論であって、視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚のいずれをとっても、信頼に足る情報を我々に提供するとは到底考え難い。たとえば、2－30人程度のクラスで一番前に座っていた学生の服の色さえ、半時間後に再現できる自信すらない。よしんば赤色の衣服であったと覚えていたとしても、はたしてどの程度の明度で、色相がいくらの赤なのか正確に判断できそうもない。デカルトが言うように、数学的（幾何学的）知識がより一層真理に近いものかはともかく、明晰性という点ではおそらくそのとおりであろうか。とまれ、近代ヨーロッパ人は、一方で人間の感覚に極力信頼を置かない抽象的合理性優位の立場を取りながら（演繹法）、他方では、人間の経験ならびに経験に基づく慣習以外に信を置かない立場を表明してきた（帰納法）。両者がバランスを保ちながら運用されるのが一番望ましいことは言うまでもない。

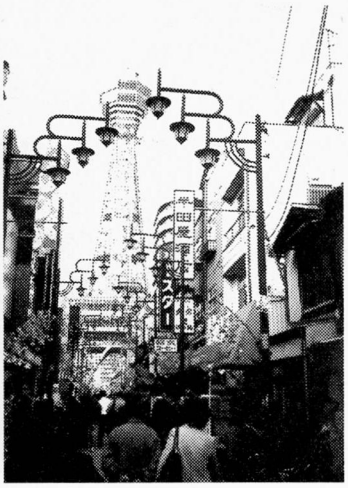
D．ヒューム（1711－76）は、人間の認識の基盤として、各人が生まれてこの方身に付けて

きた経験または経験に基盤を持つ慣習のみが真理に達する媒体であって、基本的にはこれ以外には真理にいたる道はないとした。個人の経験にのみ限定された、主観的知識を容認するため、百人の人間がいれば百通りの解釈（真理）が存在することになる。いわゆる原子論である。このような立場は少し極端であるにせよ、真理に到達する重要な手段として各人の個人的体験（経験）を据える傾向は、イギリス経験論として19世紀－20世紀に至るまでイギリス人の間では支配的な位置を占めてきた。

筆者はこの立場に全面的に与するものではない。ただ、少なくともデカルトが表明するような哲学的明晰性、厳密性が日常の我々の生活にはほぼ無用であるという立場から、普通の人間は、より「確実と思われる」認識にいたる有効な（というより、当然の）手段として自分の目、耳、手、鼻、舌の働きを重視してきた。書物や講義を通じて得られる抽象的な知識は無論必要であるものの、実は抽象化された知識は（神や愛、平和などの概念はともかく）具体的な感覚によって媒介される時、何倍もの正確さで体得できる場合がある。

これは特に歴史や社会系の授業について妥当する。たとえば、「福沢諭吉は、大阪にあった適塾というところで若い頃勉強しておりました。この塾は緒方洪庵という人物が開いておったもので、この人は医学やオランダ語、つまり蘭学を教えておりました。日本中の秀才がやってきておりました。この塾は商家を改築したもので、昔の商家は『うなぎの寝床』といわれるほど細長い形で、これは江戸時代の税金対策でして、間口が狭いほど・・・・」この調子で授業は続くのであるが、この台詞の中の情報のうち、既に他界した福沢や緒方は写真や絵で提示する他ないとしても、適塾や商家の形態などは文書や写真による解説は情報提供の手段として軽視できないものの、現場に行って現物を見せることによって一層効果があがることはいうまでもなかろう。

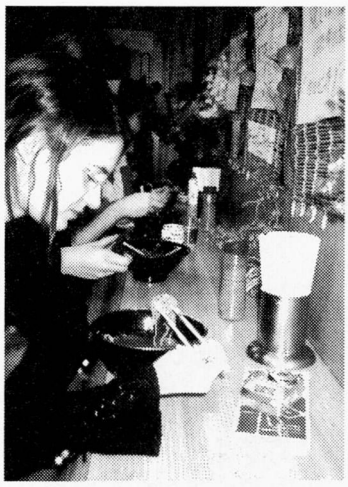
本授業研究は、鯛が食べられるなら食べようという話である。より効率的な授業の運営を行うための方策を求めて、筆者がこれまで行ってきた二つの授業、日本語日本文化研修留学生「大阪の勉強しょうか」ならびに学部留学生「日本史」を例に取りながら参加型授業の可能性について考察することを目的とする。私見では、大学などの授業は、慣例上教員の口頭による情報の提供を基本とするため、通常さほど問題視されないものの、この手段だと情報の伝達に一定の限度がある。この欠点を補うために、ビデオや現物を授業で用いる。これはこれで一つの方法なのであるが、さらに効果をあげる方法があれば、これを試みるのも一策である。勿論、本稿で述べる方法がすべての授業に適用できるわけではないので、あくまでも歴史や社会関連の授業に効果的であろうという前提の話に過ぎない。



［紹介・検討］

留学生に大阪の町を体験させようと考えて実際に実行したのは、今から10年以上前のことである。その頃、筆者は学部留学生既習者クラス（ＵＡ）読解の授業を担当していたが、親睦の意味も込

めてみんなで大阪の町を歩けたらよいなと考えていた。特に見せてあげたかったのは、最も「大阪らしい」新世界界隈であった。人数はちょうど10人くらいで、歩くのにちょうど良い人数であった。淀屋橋を出発点にして（後述するように、このコースはその後確立したコースを形成するようになる）、市役所庁舎、府立図書館、中央公会堂、大阪市立東洋陶磁美術館を見てから、動物園前まで移動した。一番の楽しみは、新世界の「食いもん屋」で立ち食いをしたり、いろんな人と会話をすることであった。この「小旅行」はその後も続いたが、やがて日研生コースの読解を担当するようになって、やや規模を拡大した形で継続することになった。



「大阪の勉強しょうか」という非常に分かりやすい授業題目にしたのは３－４年前に過ぎないが、それまで少なくとも１セメスターに一回は学生たちと大阪の町を歩いていた。いろいろ試行錯誤の末、現在ほぼ固定したコースとして、次の２コースがある。

（１）　北千里駅集合（10時）

天神橋筋６丁目下車・・・天神橋筋商店街をＪＲ天満駅まで歩く

天満から鶴橋へ・・・鶴橋国際マーケット

鶴橋から国際交流センター経由で四天王寺へ（博物館見学）

四天王寺からアベノ地下街を経て新世界へ（昼食）

新世界から大阪「歴史の道」を散策（織田作之助の碑、口縄坂など）

寺町通りから生玉神社、

松屋町通りの人形屋を冷やかしてから

大阪歴史博物館（終着点）・・・大体３時半から４時ごろ（現地解散）

（２）　千里中央駅集合（10時）

地下鉄淀屋橋駅下車

日本銀行大阪支店―大阪市役所庁舎―府立図書館―公会堂

適塾

道修町を縦横に歩いて心斎橋筋へ

戎橋から法善寺横町―法善寺へ

ナンバ花月前に至り「道具屋筋」へ

「ワッハ上方」で展示品の見学、ならびに若手落語家漫才師の実演鑑賞（現地解散）

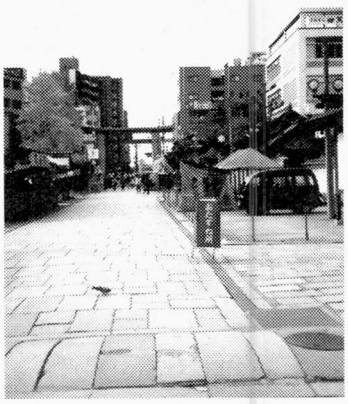
過去２年間は、年に４回大阪の町を歩いているので、これ以外に数通りのコースがある。第一のコースに関して

述べると、一番学生たちに好評なのは鶴橋国際マーケットである。様々な食材が所狭いと並んでおり、多くの学生は同様の市場が自分の国にもあると言っている。特に、韓国の学生は大喜びで勉強を忘れてショッピングしている。何年も訪れているので、ある店の店主などは「ああ、またきゃーはってんナ」と、気軽に声を掛けてくれる。また、ちりめんジャコ屋のおばさんは、毎年手の上にジャコをのせてふるまってくれる。それを学生たちは嬉しそうに食べている。また、国際交流センターも彼らには印象的な場所のようである。必ず耳にする言葉は、「なぜ外大は場所が変わったのですか。ここだったら、買い物が楽だし、遊ぶところが一杯あっていいのに～」である。既に述べたように、新世界は筆者が留学生に見せたい場所の有力なものであるが、最近はずいぶん若者の町に変身したようである。ほんの十年ばかり前は、「じゃんじゃん横丁」のアーケードは未だ戦後を思わせる蒼然たる「あやしい」雰囲気であったのに、今ではテレビで紹介された大人気の串かつ屋に若い男女が列を作るようになった。将棋を知る留学生はほぼ皆無ではあるが、５０円ゲームセンターが数軒あることを告げると、必ずリピーターになる学生が現われる。

さらに、四天王寺では、建立当時の日本において、西方極楽浄土信仰があったことを、有名な石の鳥居を見ながら学んだ。その当時、浪花の海が今よりはるか東側に入り込んでおり、寺から程近いところに日没を拝むことができた話は、学生たちにとってかなり興味深いらしい。

第（２）のコースでは、筆者としては一番のお勧めは適塾である。このコースに従って大阪めぐりをする前に、かならず福沢諭吉『福翁自伝』の一説を読むことにしている。後述する教科書『留学生のための大阪読本』には江戸時代の学生の勉強風景を活き活きと表した箇所を引用してあるが、同書にある次の箇所もまた面白い；

> それから緒方の塾に這入てからも私は自分の身に覚えがある。夕方食事の時分に若し酒があれば酒を飲で初更に寝る。一寝して目が覚めると云うのが今で云えば十時か十時過、それからヒョイと起きて書を読む夜明けまで書を読んで居て、台所の方で塾の飯炊がコトコト飯を炊く支度をする音が聞こえると、それを合図に又寝る。寝て丁度飯の出来上がった頃起きて、其儘湯屋に行て朝湯に這入て、それから塾に帰て朝飯を食べて又書を読むと云うのが、大抵緒方の塾に居る間殆ど常極りであった[2)]。



勉強を中心に据えた当時の学生の生活が伝わって非常に興味深い。さらに、当時「寮」に用いられた二階の大部屋で、留学生たちは実際に福沢たちが「試し切り」した柱の傷跡を触ったり、一人一畳の学生たちの「領地」に実際に寝そべったりして、本の内容を実地に確かめている。非常に窮屈な環境の中でどのように150年前の日本人が学問したか、体得できる。

このコースのもう一つの目玉は「ワッハ上方」である。筆者の授業は、大阪に関する広く浅い知識の提供と体験を骨子としているが、中でも大阪弁に関する関心の度合いは例年非常に高い。授業では若手の漫才師を中心にビデオなどを見せたり、田辺聖子氏の『大阪弁面白草子』その他を用いて、大阪弁、河内弁の「理論」についてさわりの学習を行っている。桂米朝が使うような本格的な「はんなりした」大阪弁はあまり馴染みも興味もないらしく、学生の主たる関心は河内弁などのちょっと崩れた荒っぽい大阪言葉のようだ。「ワッハ上方」では目の前にいる芸人が、学生たちを直接からかいにきたり、また、ちょっと日本語に自信のある学生は逆に芸人に声を掛けたりで、なかなか面白いやり取りが見られる。

道中のもう一つの楽しみ（筆者には一番の楽しみ）は、つまみ食い、立ち食いである。文化の中で、食に関するものはおそらく最も重要である。特に、「食いだおれ」の町、大阪では然りである。教科書にも引用した、織田の『夫婦善哉』の一節、これが大阪庶民の文化で無くして何であろうか。大好きな箇所である。

柳吉はうまい物に掛けると眼がなくて、「うまいもん屋」へ屡屡蝶子を連れて行った。彼に言わせると、北にはうまいもんを食わせる店がなく、うまいもんは何といっても南に限るそうで、それも一流の店は駄目や、汚いことを言うようだが銭を捨てるだけの話、本真（ほんま）にうまいもん食いたかったら、「一ぺん俺の後へ随いて・・・」行くと、無論一流の店へははいらず、よくて高津の湯豆腐屋、下は夜店のドテ焼、粕饅頭から、戎橋そごう横「しる市」のどじょう汁と皮（ころ）鯨汁、道頓堀相合橋東詰「出雲屋」のまむし、日本橋「たこ梅」のたこ、法善寺境内「正弁丹吾亭」の関東煮、千日前常磐座横「寿司捨」の鉄火巻と鯛の皮の酢味噌、その向かい「だるまや」のかやく飯と粕じるなどで、何れもぜにのかからぬいはば下手もの料理ばかりであった。芸者を連れて行くべき店の構えでもなかったから、はじめは蝶子も択りによってこんな所へと思ったが、「ど、ど、ど、どや、うまいやろが、こ、こ、こ、こんなうまいもん何処イ行

ったかて食べられへんで」という講釈を聞きながら食うと、なるほどうまかった[3)]。

それぞれのコースで大体食べるものが決まっていて、四天王寺の「釣鐘饅頭」「アベ地下」のみたらしだんご、新世界の「すうどん」、また小腹がすけば粟おこしを食べたりする。さらに、心斎橋筋で一枚100円のキャベツ焼き、たこ焼き、千日前通りを南に渡った所の50円コロッケなど、「下手もん」を食べるのもこの小旅行の醍醐味である。勿論、教科書では以上のすべての食べ物に関してあるていど解説を行っているので、学生たちは既に多少の予備知識を持っている。

お好み焼きは留学生の間では、ほぼ定番のメニューであるようで、かなり詳しい学生もいる。昨年この授業に出ていたオーストリアの学生は、結局卒業論文のテーマにお好み焼きを選んだ。いろんな書物を調べると同時に、可能な限り実地調査を行ってお好み焼きについて調べたのには、大変興味を覚えた。同学生は大阪人とお好み焼きについて；

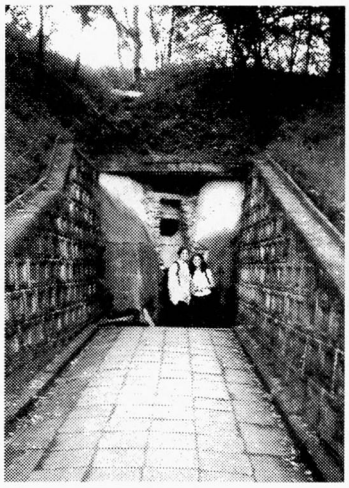
昔から「食い倒れ」といわれてきた大阪だが、確かに大阪人で、食べることにこだわりがあるという人が多い。大阪だけではなく、関西の多くの人が、味にこだわるという点で共通しているのではないだろうか。

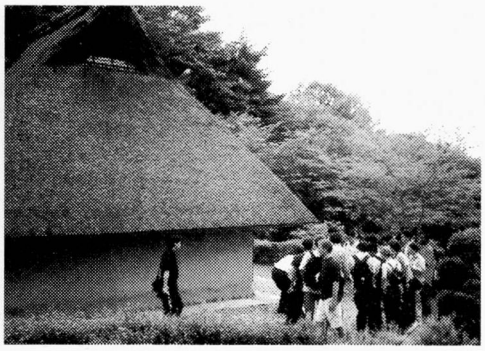
明治維新以前の武家社会には、食べ物の味に関して、おいしいとかまずいとかいう風に云々するのは卑しいという思考があった。食べることについてとやかく言うのではなく、出されたものを、何でも感想を言わずにありがたく食べるというのは支配階級として倫理的に当然ともいえるが、そんな風潮の中では、食文化が発達しにくいのではないか。

一方、町人の町であった大阪はその正反対で、庶民階級の間から生まれた文化だから、その最大の楽しみは食べることと喋ることに尽きる。上等な食材や店はあまりなく、大衆的な店が多かったのである。だが客筋としては、大衆店のほうが味にうるさい。接待でなく自前で食べるのだから、おいしいとかまずいとか、自分の感想を述べても良い[4)]。

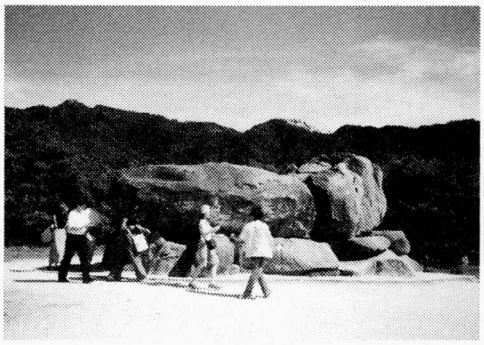
と述べて、大阪を中心とした食文化の特徴を、お好み焼きという彼女自身の好物を通じて論じた点で、印象的であった。今後も、大阪に関する様々な事柄に関して、同様の研究がなされることを期待している。

次に学部留学生の「日本史」について、これまで行ってきた実地研修の実情を紹介しよう。基本的なコンセプトは「大阪の勉強しょう」と同様である。筆者個人の経験から言うと、中学生、高校生時代の歴史の授業はほとんど試練に近いものであった。特に昼食後５時間目の歴史の授業は睡魔との闘いであった。もともと歴史に興味のある者にしてこの調子であったから、留学生のように日本の歴史に格段関心がない場合は、よほどうまく授業を運営しないと彼らにとって苦痛以外の何ものでもなくなるだろう。勿論、教員は学生に対して及び腰で接する必要はないのであって、自分が教えたい

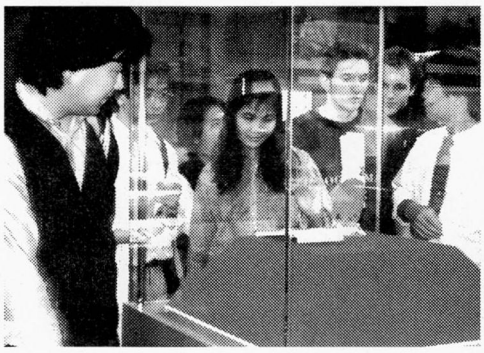




内容を自信満々に教えればよいのである。しかし、現実はなかなかそのようにいかない。確かに、筆者から見て信じがたいほど日本史に関心を持つ学生が時々いる。ただし、そのような学生はやはり極めて稀であり、教員として留学生の関心を引く絶え間ない努力を要する。これも後述するが、日本史のクラスでは独自の教科書を開発して、できる限り学生に分かりやすく、必要とされる情報の提供に努めてきた。しかし、教科書に記載された内容だけではどうしても限界があり、内容をより効果的にかつ印象的に知ってもらうためには、プラスアルファの工夫が要請される。このために課外学習として実地研修を行うことは極めて効果的であり、学生たちの気分転換という面でも有効である。日本史の実地見学に関しては、昨年退官された小林教授からその必要性を凡そ6年前に打診された。筆者としては全く異存はなく、早速翌年からの実施に向けて非常勤講師の實平先生、中井先生、井上先生と相談しながら適切な研修地の選択に取り掛かった。経験豊富な先生方のご提案もあって、研修地の候補は多くあった。



これまで、滋賀県の銅鐸博物館、安土城城跡、石舞台古墳、仁徳天皇稜、弥生博物館、大阪府近つ飛鳥博物館、堺市考古学博物館、和歌山紀伊風土記の丘、和歌山城、酒蔵などを訪れた。これらの施設の中で、大阪府内にあり、留学生が無料で利用できる施設については、末尾に掲載した一覧表を参照されたい（13～15ページ）。学生たちは通常の狭い教室では見ることができないほど自由闊達に動き回り、専門員にいろいろな質問をする。実地研修の主たる目的は、授業で学んだ事項が机上の空論とならないように実地に原物を観察することにある。さらに、授業で学んだ考古学的遺物を自ら体験的に製作する機会を与えるようにした。これまで、勾玉や土鈴などを作った。出来上がった作品は、記念にもなりこの企画はかなり好評を博した。



体験といえば、今年度一回目の研修で訪れた和歌山の酒蔵訪問は、ほとんどの学生が初体験ということで、非常に印象的であったようだ。ただ、まだ未成年の学生が三分の一程度いたので、彼らに「利き酒」の体験を遠慮してもらった点が問題点であった。ちなみに、学生は毎年変わるのだから研修地は毎年同じでも良いのではない

かという指摘もあるが、研修は必ずしも学生のためだけにあるのではなく、教員の見聞を広めるという意味もあると考える。従って、これまでできる限り多様な研修地を訪れるよう務めてきた。

[教科書について]

以上、日研生向き「大阪の勉強しょうか」と学部留学生向き「日本史」の授業の概要を説明、紹介した。冒頭でも述べたように、効率的な授業を展開するためには、提供する情報の内容がきわめて重要である。時々刻々変化する情報を過不足なく提供することは理想であるが、実際には多人数の学生に対して一定の情報を提供するためには、ある程度の情報の固定化が必要となる。この目的のために、教科書の選定が枢要な事項となる。「大阪」の授業において、2年前までは筆者がこれまで読んだ書物や新聞、興味深いビデオなどの情報を適宜提供していた。しかし、この授業全体のコンセプトは大阪の専門家を作り出すことではなく、彼らがたまたま学習の地として選んだ町、或いは関係の深い町について、できるだけ浅く、広く知ることである。この意味で、臨機応変に柔軟に情報を提供することは長所がある反面、欠点も多い。つまり、学生たちが自身で焦点を絞れずに大阪の町を一面的に理解してしまう恐れがある。従って、できるだけ客観的に、過不足なく「大阪らしさ」を可能な限りバランスの取れた状態で提示する必要を感じたのである。こうして『留学生のための大阪読本』を作った。大阪に関する様々な情報は専門家から見ればあまりにも皮相的だと思われるであろう。それはそれで良い。不足している部分、また学生が特に知りたいと希望する情報は、別にテキストを配布すれば良いのであって、とりあえず留学生が抱いている大阪のイメージを重視した。

参考までに、この本で扱う内容は以下のとおりである。

1）　地理と歴史

　　一服コーナー　　文楽の魅力

　　キタとミナミ

2）　大阪のイメージ

　　谷崎潤一郎（「関西見聞禄」から）

　　織田作之助（「木の都」「夫婦善哉」から）

　　一服コーナー　　青空カラオケ

3）　大阪弁

　　田辺聖子（『大阪弁　面白草子』から）

　　漫才に見る大阪弁（やすし・きよしの漫才から）

4）　大阪の名所
　　大坂城の歴史
　　適塾（福沢諭吉『福翁自伝』から）
　　鶴橋国際マーケット
　　新世界
　　四天王寺
　　一服コーナー　　フリーマーケット（蚤の市）
5）　大阪のうまいもん・・・うどん、お好み焼き、たこ焼き
6）　大阪に来た外国人
7）　大阪の影の部分・・・・釜が崎とホームレス
8）　大阪の祭り・・・・天神祭り
9）　大阪の祭礼・年中行事
　　一服コーナー　　大阪の名物
10）　学生たちの感想と意見

後でも触れるが、この総花的な項目の扱い方について、学生たちは教科書の意図を汲んでくれている様子で、広く浅い内容は、退屈しなくて良いと言う意見がある。

一方、日本史の教科書は、当初東京外国語大学監修の山川出版社刊、留学生用日本史教科書を使用していた。しかし、編集の方法や内容の提示方法で若干違和感があったので、担当教員4人で知恵を寄せ合って自前の教科書を作ることにした。同書の「はじめに」に記したように、

> 歴史は過去との対話であり、未来を示す指針でもある。さらに、それは娯楽でもあり、教養でもある。このように歴史を学ぶ動機は種々様々である。ところで、留学生日本語教育センターにおける学部留学生のための歴史教育は、たぶんに実際的側面が視野に入れられてきた。ここで言う「実際的」とは、受験に必要な場合や、次大学での専攻科目と直結している場合、さらにセンターでのほかの専門科目あるいは教材の理解を容易にする場合などをさしている[5)]。

という趣旨は今も変わっていない。ただ、実際に授業で用いると、予想もしなかった問題が生じたことも事実である。幸い初刷り分がすべてなくなったので、これを機会にほぼ全面的に改訂することにした。旧教科書の最大の問題点は、まだ日本語運用能力が十分でない5月6月頃の留学生たちには、文体（漢字、表現など）が少し難解にすぎたことである。新教科書では、この点を修正した。さらに、資料として用いる写真などはできるだけこれまでの実地研修で入手したものを活用するなどの工夫もしている。

こうして、授業で用いるテキストは漸次改善が進められている。この教材をより効率的に学生たちに伝えていく工夫が次に要請される。既に述べたように、効率的な授業を行うためには、提供する情報の信憑性、ならびに提示の方法が重要である。人間は知識を得るのに、通常理性と感性の両方を用いるので、書物の知識と平行して実地の体験でそれを確証することが必要と考えるのである。まさに両者は相互補完的であって、どちらか一方のみに偏ることは望ましく

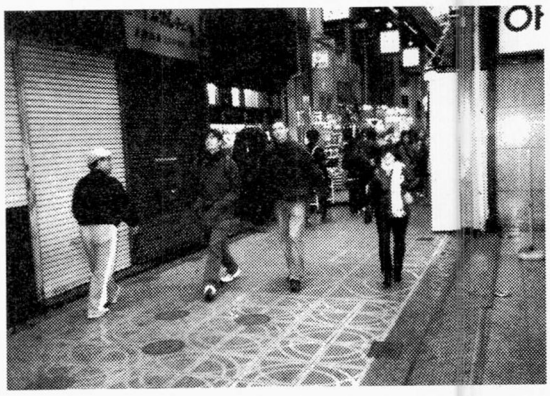
ないであろう。

[授業の手順と問題点]

いずれの授業も、学生たちにテキストを読ませることとその解説からなっている。『留学生のための大阪読本』を例に取ると、筆者自身が記述した地の文はこれまでの経験に基づいて、ほぼ学生の平均的読解能力に合致した難度であるが、引用した文は多くの場合彼らの能力を超えている。たとえば、既述の『福翁自伝』などは、表現のみならず、用いられた漢字は相当に難解な場合が多いので、学生たちの手に余るようである。この本などは成立の経緯からして、比較的やさしいはずであるが、それでも留学生の能力を超えていることはこれまで明らかになった。従って、簡単な語句説明を引用文の後に付加している。それでも、読めない学生が多いのは例年の習いとなっている。これは、口頭での解説によって相当補えるのだが、すべての文を彼らの実力に合わせて書き直すのは、原文の持つ面白さが損なわれるので好ましくないと考える。ただし、明治時代の知識人の知的水準は、現代人のそれと比較にならないほど高いので、この点は考慮する必要があろう。

このように教室でテキスト、ビデオその他で学習したあとで、いよいよ町へ繰り出すわけだが、ここでの最大の問題点は、参加者の人数である。例年前期の授業には20－25名の学生が登録する。時に友人を同伴する者もいて、最大で30名近くになったことがある。出席率は極めて高いのが特徴だが、この人数で大阪の町を歩くと統制の面でいろいろと予期せぬ問題が生じる。歩くのが遅い学生や、写真をとってなかなか移動しないなどの問題である。筆者一人でこれだけの人数を引率するのは、年によっては非常に困難である。幸い、後期は10人前後の場合が多いので、やりやすい。私見では、８－10人ぐらいが適正な人数であると考えている。

それぞれの行程を歩くのに、大体５－６時間を要する。したがって、平日に実施することは困難であり、必然的に土曜日を中心に、センターの授業のない日に行わざるをえない。実施日に関しては、今の所これ以上の妙案が浮かばないのが実情である。



さらに、参加者の経費負担の問題がある。今のところ苦情は出ていないので、学生たちには交通費の負担をお願いしている。この授業をセンターの経費で運営する方途も考えられないわけではないが、今のところＪコースの１授業に過ぎないので、特別扱いするわけにはいかないであろう。あるいは、将来の可能性として、この授業が必修科目にでもなればその可能性はあるかもしれない。また、もう一つの

可能性として、たとえば大阪市との連携事業として推進することができるかもしれない。ただその場合、現在のように自由勝手に大阪の町の隅々を見学する活動に、ある程度の縛りがかかるかもしれない。

[学生たちの感想]

本授業研究の執筆に際して、改めて学生たちにこの授業に関する意見、特に改善点について尋ねてみた。あらかじめ学生たちには意見の公表の許可を得てあるので、ここで代表的な意見を紹介したい(以下ほぼ原文どおりに掲載する)。

☆来日する前に大阪弁はきつくて、聞きにくいこと以外に大阪については何も知らなかったんです。しかし、この授業をとって、大阪の文化や歴史などがだんだんわかってきて、好きになりました。この授業の一番面白くて、ほかの授業と違うところは本を読むだけではなく、現場に行って見学することだと思います。本を読むより、見学のほうはすぐに、そして長く頭に残っているのです。春学期、またこの授業を楽しみにしています。

☆「大阪学」の授業の長点(所?)はうまく書かれた教科書だと思う。しかし、この教科書を授業のときだけではなくて家でも読ませたほうがいいのではないか。そうしたらば、クラスで全ての文書を(声を出して)読ませずに、先生の話と議論に集中することができるかもしれません。大阪弁などのビデオを見せてもらってよかったと思う。Field Workについてもぎもんやもんくはありません。

☆授業はとても教育的だと思う。それからおもしろい。大阪の見学も役に立つ。しかし歩き方はとても早いので、少しマラソンみたいでした。それで疲れきって、最後に行ったところに興味がなくなってしまった。もう少しスロウペースだったら、よいと思う。実は、大阪弁が分かりにくいので、テレビ番組を見ると、わかりにくい所(が)ある。もう少し説明してくれたら、幸せですよ。

☆この授業で大阪の食べ物や文化などいろんなことについて詳しい情報を集めることができるから、授業の仕方が(は)このままでいいと思います。ただ一学期に二回ぐらい大阪を歩いて旅行するのはいいと思いますが、旅行の数が増されたら、もっと参考になるでしょう。

☆授業は本当にすばらしい。先生も明るくて、様々な分野に興味を持っている。授業の弱点は少ない。読み物が多すぎる。実際に目で見ることや、少なくとも映画で見る機会がもっと多ければありがたいことだ。大阪での男女関係や、祭りや、見所など。それ以外に、授業でとても満足だ。

全体としての評価が高いのはありがたいのだが、本来この授業は「読解」科目として提供されているのを学生たちは忘れているような気がしないでもない。とまれ、冒頭でも記したとおり、授業での文字を通した知識と実際に歩いて五感で確かめた見聞とのバランスこそがこの授業の到達点である。もとより、授業回数の半分程度を実地見学に用いることは現実に不可能であるし、必ずしも効率的ではないと思う。また、筆者自身の体力の問題もあるので、一学期2回が限度である。さらに指摘したい点は、大阪で用いられる言葉、大阪弁に対する関心が非常に高いことである。私見では、大阪弁を特化した形で教えることは必ずしも日本語教育上プラスにならない面があるように思う。ほぼ完全に標準的日本語が理解できる学生が、さらに一歩進んだ関心から大阪弁を学ぶのと、面白そうだからという理由だけで大阪弁を最初の日本語として学ぶのでは、大変な違いがあるだろう。

いずれにせよ、これまで聞いた学生たちの意見を参考にして、おおむね授業の主旨は理解されているように思う。ただし、繰り返すが本授業の目的は「広く浅い」大阪の知識であるから、これをきっかけに大阪の歴史や文化を学ぶもよし、単に生活を楽しむ手段にするのもよし、全て学生しだいである。

〔おわりに〕

鯛を知るにはどうすればよいか。書物などで、鯛は「めでたい」との語呂合わせから伝統的に慶事に欠かせない魚で、色はピンク、身は白である、おいしい、春先の鯛は桜鯛などといわれ珍重される、特に瀬戸内海明石モノは最高とされる、云々・・・、などと読んでも隔靴掻痒の思いである。勿論、書物による知識の獲得は重要である。同時に、鯛を知る一つの方法は食べることである。では、「おいしく」鯛を食べるにはどうすればよいか。そのまま刺身にするか、少し仕事を施して湯霜にするか、酢でしめてから酢飯と握ってもよし、押してもよし、大胆に兜煮にしてもよい。鯛茶漬けなどというのもある。いずれも鯛である。筆者は、授業で留学生たちに鯛の味を強要することは好ましくないと思う。様々なメニューの中から、彼らが主体的に選択すること、実はこれが参加型授業の可能性であり究極的目的であると考えている。

〔註〕

1）谷崎潤一郎『文章読本』、六興出版、1973年、6ページ。

2）福沢諭吉『福翁自伝』、金園社、昭和42年、96ページ。

3）織田作之助『夫婦善哉』、新潮文庫、平成12年、「夫婦善哉」12－3ページ。

4）Brigitte Deisenhammrer、「大阪の食文化「お好み焼き」」、『日本語・日本文化研修留学生修了論文集、7』、2005年、大阪外国語大学日本語に本文か教育センター、23ページ。

5）実平、中井、井上、嶋本、『留学生のために日本史』、大阪外国語大学留学生日本語教育センター日本語教材叢書NO．36、2002年、「はじめに」。

（しまもと　たかみつ　本センター教授）

留学生特別入場施設紹介

	施設名／住所	開館時間	休館日	行き方	紹介
1	いばらき しりつ かわばた やすなり ぶんがくかん **茨木市立川端康成文学館** 〒567-0881 茨木市上中条2-11-25 TEL.072-625-5978	9:00～17:00 (月曜日は12:00まで)	火曜日・祝日の翌日 (火曜日が祝日の場合は水曜日) 12月28日～1月4日	JR「茨木」駅、阪急電鉄「茨木市」駅より徒歩約20分 名神茨木ICから車で約7分(駐車場有)	川端康成の生い立ちと文学について、著書、遺品、書簡、原稿、墨書、写真や模型など約400点で紹介しています。6月には生誕月を記念する企画展を開催します。
2	いばらき しりつ ぶん か ざい しりょう かん **茨木市立文化財資料館** 〒567-0861 茨木市東奈良3-12-18 TEL.072-634-3433	9:00～17:00 9:00～12:00(月曜日)	火曜日・祝日 (火曜日が祝日の場合は翌日も) 12月28日～1月4日	阪急電車京都線「南茨木」駅下車、東へ徒歩8分(約350m)	銅鐸の時代、鏡の時代、仏教とキリシタンの時代、民俗の時代、戦争と生活の5つのコーナーに分け、茨木市の歴史を展示解説。
3	に ほん みん か しゅうらく はくぶつ かん **日本民家集落博物館** 〒561-0873 豊中市服部緑地1-2 TEL.06-6862-3137	10:00～17:00(3～10月) 10:00～16:30(11～2月) (入館は閉館30分前まで)	月曜日 (祝・休日の場合は翌日) 12月26日～1月4日	北大阪急行(地下鉄御堂筋線接続)「緑地公園」駅より徒歩15分	江戸時代の日本各地の代表的な民家の11棟を移築復元し、関連民具と合わせて展示する野外博物館。
4	おおさか ふえい はっとり りょくち と し りょくかしょくぶつえん **大阪府営服部緑地都市緑化植物園** 〒561-0872 豊中市寺内1-13-2 TEL.06-6866-3622	10:00～17:00 (入館は16:00まで) 7月20日～8月31日までは 10:00～18:00 (入園は17:00まで)	火曜日 (祝日の場合は翌日) 12月29日～1月3日	北大阪急行(地下鉄御堂筋線「緑地公園」駅下車徒歩10分・阪急バス「阪急豊中」駅から緑地公園駅バス、「寺内1丁目」下車すぐ)	都市緑地植物園に関する展示会及び講習会。3回～4回／月があります。
5	いつ おう びじゅつ かん **逸翁美術館** 〒563-0053 池田市建石町7-17 TEL.072-751-3865	10:00～17:00 (入館は16:30まで)	月曜日 (祝日の場合は開館、翌火曜日休館) 展示替期間 年末年始	阪急電鉄宝塚線「池田」駅下車、北へ徒歩10分	館蔵品より年4回テーマを設定して企画展を開催。 http://www.itsuo-museum.com
6	おおさか ふ えい みの お こうえん こんちゅうかん **大阪府営箕面公園昆虫館** 〒562-0002 箕面市箕面公園1-18 TEL.072-721-7967	10:00～17:00 (入館は閉館30分前まで)	毎週火曜日 (火曜日が祝祭日の場合は開館、翌日が休館) 年末年始	阪急宝塚線「石橋」駅にて箕面線に乗り換え「箕面」駅下車 滝道を北へ徒歩約13分	展示室では触ることのできる昆虫模型や、コオロギ、スズムシの鳴き声が聞こえる装置、標本約1700種、7000点が並んでいる。広さ200㎡の放蝶園では、四季を通じて蝶の飛び交う姿が観察できる。
7	おおさか しりつ とう よう とう じ びじゅつかん **大阪市立東洋陶磁美術館** 〒530-0005 大阪市北区中之島1-1-26 TEL.06-6223-0055	9:30～17:00 (但し入館は16:30まで)	月曜日及び祝日の翌日 (但し3月22日・5月3日は開館)	地下鉄御堂筋線「淀屋橋」駅、堺筋線「北浜」駅下車 京阪電車「淀屋橋」駅、「北浜」駅下車 いずれも徒歩5分、中之島中央公会堂東側	「安宅コレクション」「李秉昌コレクション」を含む館蔵品の中から約260点を展示し、東洋陶磁史の流れをご観賞頂けます。
8	おお さか し りつ か がく かん **大阪市立科学館** 〒530-0005 大阪市北区中之島4-2-1 TEL.06-6444-5656	9:30～16:45 (入館は16:00まで)	月曜日(祝日の場合は開館) 祝日の翌日 (土・日・祝日の場合は開館) 12月28日～1月4日	地下鉄「肥後橋」駅より徒歩8分	展示品に触れながら"宇宙とエネルギー"を体験。巨大ドームを利用したオムニマックス映画とプラネタリウムが楽しめます。 http://www.sci-museum.kita.osaka.jp/
9	おおさか じょうてん しゅ かく **大阪城天守閣** 〒540-0002 大阪市中央区大阪城1-1 TEL.06-6941-3044	9:00～17:00 (入館は16:30まで)	12月28日～1月1日	地下鉄「森ノ宮」駅、「谷町4丁目」駅下車徒歩15分 JR環状線「大阪城公園」駅・「森ノ宮」駅下車徒歩20分 市バス「大手前」下車徒歩10分	館内には歴史資料を展示し、ミニチュア模型や映像を使って大阪城の歴史を紹介しています。
10	おおさか じょうにし まる てい えん **大阪城西の丸庭園** 〒540-0002 大阪市中央区大阪城2 TEL.06-6941-1144	9:00～17:00 (入園は16:30まで)	月曜日 (休日の場合は翌日) 12月28日～1月4日 雨天時には休園になることがあります。	地下鉄「森ノ宮」駅、「谷町4丁目」駅下車徒歩15分 JR環状線「大阪城公園」駅・「森ノ宮」駅下車徒歩15分 市バス「大手前」下車徒歩10分	重要文化財の建造物に囲まれた庭園の約半分の面積に敷き詰められた芝生を中心に春の桜、秋の紅葉、冬のさざんかなど四季を通し楽しめます。 http://www.inet-osaka.or.jp/tourism/category/sightsee/garden/001/gar001a.htm
11	おおさかこくさいへいわ **大阪国際平和センター(ピースおおさか)** 〒540-0002 大阪市中央区大阪城2-1 TEL.06-6947-7208	9:30～17:00 (入館は16:30まで)	月曜日・祝日の翌日・年末年始・館内整理日(毎月月末)ただし祝日の翌日及び月末が日曜日に当たるときは、その翌々日の火曜日になります。	JR環状線・地下鉄「森ノ宮」駅下車西へ約5分	大阪の戦争体験を伝える大阪空襲と人々の生活、アジア太平洋地域の拡大と終戦までの推移、戦後の平和への希求を展示。
12	おおさか れき し はく ぶつ かん **大阪歴史博物館** 〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32 TEL.06-6946-5728	9:30～17:00 9:30～20:00(金曜日のみ) (入館は閉館30分前まで)	火曜日 (祝日の場合は翌日) 年末年始 (12月28日～1月4日)	地下鉄谷町線・中央線「谷町4丁目」駅下車徒歩3分	歴史的景観を楽しみながら「都市おおさか」の変遷を原寸大復元模型や映像、豊富な実物資料などによって体験できる博物館です。 http://www.mus-his.city.osaka.jp/
13	ゆ き びじゅつかん **湯木美術館** 〒541-0046 大阪市中央区平野町3-3-9 TEL.06-6203-0188	10:00～16:30 10:00～19:00(第1金曜日) (入館は閉館30分前まで)	月曜日 (祝日の場合は翌日) 展示替期間	京阪電鉄「淀屋橋」駅より徒歩7分 地下鉄御堂筋線「淀屋橋」駅⑪番出口より徒歩5分	日本料理「吉兆」の創業者、湯木貞一氏のコレクションを収蔵。茶の湯の道具、懐石の器、日本の古美術品を中心とする。春季と秋季の年2回テーマを設定して企画展を開催。 http://www.yuki-museum.or.jp/

留学生特別入場施設紹介

	施設名／住所	開館時間	休館日	行き方	紹介
14	おおさかふりつかみがたえんげいしりょうかん かみがた **大阪府立上方演芸資料館(ワッハ上方)** 〒542-0075 大阪市中央区難波千日前12-7 YES NAMBAビル4階 TEL.06-6631-0884	11:00～18:00 (入館は17:30まで)	毎週水曜日 (祝日の場合は翌日) 12月27日～1月1日	地下鉄「なんば」駅、近鉄・南海「難波」駅より徒歩5分、JR「難波」駅より徒歩10分	見て、聞いて、遊んで。懐かしの上方演芸の世界が、ハイテクと伝統技法を駆使した展示でよみがえります。見どころ:上方亭3Dシアター、特別展、演芸ライブラリーなど。 http://mic.e-osaka.ne.jp/kamigata/
15	こうつうかがくはくぶつかん **交通科学博物館** 〒552-0001 大阪市港区波除3-11-10 TEL.06-6581-5771	10:00～17:30 (入館は17:00まで)	月曜日(祝日の場合は開館) (学校の春・夏休みは開館) 12月29日～1月2日	JR環状線「弁天町」駅下車徒歩1分	鉄道を中心とした交通の科学・歴史・文化を紹介しています。 http://www.mtm.or.jp
16	てんのうじこうえん **天王寺公園** 〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-108 TEL.06-6771-8401	9:30～17:00 (入園は16:30まで)	月曜日(休日の場合は翌日) 12月29日～1月1日	地下鉄谷町線・御堂筋線・JR「天王寺」駅、近鉄「あべの橋」駅下車徒歩10分	温室やスライド上映が行われる映像館、明治時代の名園、慶沢園などもあり、花と緑に囲まれた公園です。
17	おおさかしりつびじゅつかん **大阪市立美術館** 〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-82 天王寺公園内 TEL.06-6771-4874	9:30～17:00 (入館は16:30まで)	月曜日 (祝日又は振替休日の場合は翌日) 年末年始	地下鉄谷町線・御堂筋線・JR「天王寺」駅、近鉄「あべの橋」駅下車徒歩10分	絵画や彫刻、工芸品など約15,000点もの日本や中国の昔の作品を所蔵、随時展示替えをしながら展示しています。
18	てんのうじどうぶつえん **天王寺動物園** 〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-108 TEL.06-6771-8401	9:30～17:00 (入園は16:00まで)	月曜日(休日の場合は翌日) 12月29日～1月1日	地下鉄御堂筋線「動物園前」駅下車徒歩5分	約11haの園内に300種1500点の動物を展示し、都会のオアシスとして多くの利用者でにぎわっています。
19	してんのうじほうもつかん **四天王寺宝物館** 〒543-0051 大阪市天王寺区四天王寺1-11-18 TEL.06-6771-0066	8:30～16:30(4～9月) 8:30～16:00(10～3月) (入館は閉館20分前まで)	月曜日 (祝日、特別な行事の場合は開館)	地下鉄谷町線「四天王寺前夕陽ヶ丘」駅より南へ徒歩5分 JR・地下鉄「天王寺」駅、近鉄「あべの橋」駅より北へ徒歩15分	聖徳太子が創建された四天王寺では、収蔵する500余点の国宝・重文等の寺宝を宝物館にて展観しています。 http://www.shitennoji.or.jp
20	おおさかじんけんはくぶつかん **大阪人権博物館(リバティおおさか)** 〒556-0026 大阪市浪速区浪速西3-6-36 TEL.06-6561-5891	10:00～17:00 (入館は16:30まで)	月曜日(祝日の場合は開館) 祝日の翌日・第4金曜日 年末・年始 臨時休館日	JR環状線「芦原橋」駅下車、南へ徒歩8分・大和路線「今宮」駅下車、西へ徒歩10分 市バス「浪速西3丁目」下車、西へ徒歩2分 南海汐見橋線「木津川」駅下車東へ徒歩6分	被差別部落と身分・性と家族・民族と列島の南北・身体文化と環境などのキーワードに基づき、それぞれの差別問題について理解を深める。 http://www.liberty.or.jp/
21	さくやこのはなかん **咲くやこの花館** 〒538-0036 大阪市鶴見区緑地公園2-163 TEL.06-6912-0055	10:00～17:00 (入館は16:30まで)	月曜日(休日の場合は翌日) 12月28日～1月4日	地下鉄長堀鶴見緑地線「鶴見緑地」駅下車徒歩約10分	熱帯から極致圏まで地球上の様々な気候条件のもとで生育する植物約2,600種15,000株を展示する日本有数の総合植物館です。 http://www.ocpa.or.jp/sakuya
22	ながいしょくぶつえん **長居植物園** 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23 TEL.06-6696-7117	9:30～16:30 (入園は16:00まで)	月曜日(休日の場合は翌日) 12月28日～1月4日	地下鉄御堂筋線「長居」駅下車徒歩10分 JR阪和線「長居」駅、下車徒歩15分	四季折々の花が絶えることなく咲き乱れ、数多くの野鳥が集まる自然の楽園—24haの広さをもつ植物園です。 http://www.ocpa.or.jp/h-saku/
23	おおさかしりつしぜんしはくぶつかん **大阪市立自然史博物館** 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23 TEL.06-6697-6221	9:30～16:30 (入園は16:00まで)	月曜日(休日の場合は翌日) 館内整理日、毎月末日 (但し、土・日曜日、休日の場合は除く) 12月28日～1月4日	地下鉄御堂筋線「長居」駅下車徒歩10分 JR阪和線「長居」駅、下車徒歩10分	自然の移り変わりや人間のかかわりの歴史が、化石や植物、動物などの標本や模型の展示を通して楽しく学べます。 http://www.mus-nh.city.osaka.jp/
24	おおさかしりつだいがくりがくぶふぞくしょくぶつえん **大阪市立大学理学部附属植物園** 〒576-0004 交野市私市2000 TEL.072-891-2059	9:30～16:30 (入園は16:00まで)	月曜日 (但し、休日の場合は開園) 年末年始	京阪交野線「私市」駅下車、徒歩6分 JR学研都市線「河内磐船」駅下車、徒歩20分	約25haの園内に日本産樹木の約8割の種類を植栽し日本の代表的な11の樹林型を構成しています。 http://www.sci.osaka-cu.ac.jp/biol/botan/
25	おおさかふりつせんぼくこうこがくしりょうかん **大阪府立泉北考古資料館** 〒590-0116 堺市若松台2丁4 大蓮公園内 TEL.072-291-0230	9:00～16:30 (入園は16:00まで)	月曜日・火曜日 12月28日～1月4日	泉北高速鉄道「泉ケ丘」駅より南へ約7分 「大蓮公園内」	当資料館のある陶器古窯跡群は、今から約1600年前から500年間にわたって、日本最大の須恵器生産地であり、ここにあった400基あまりの窯跡・数十基の古墳などを調査し、そこから出土した須恵器を中心に展示しています。
26	さかいしはくぶつかん **堺市博物館** 〒590-0802 堺市百舌鳥夕雲町2丁 大仙公園内 TEL.072-245-6201	9:30～17:15 (入館は16:30まで)	月曜日(祝日の場合は翌日) 土・日曜を除く祝日の翌日、年末年始、展示替期間	JR阪和線「百舌鳥」駅下車、西へ徒歩6分 南海バス「堺市博物館前」下車、南東へ徒歩4分	常設展示「堺—仁徳陵と自由都市」及び、年数回の企画展を開催、特別展を年1回開催。

留学生特別入場施設紹介

	施設名／住所	開館時間	休館日	行き方	紹介
27	さかいしだいせんこうえんにほんていえん **堺市大仙公園日本庭園** 〒590-0801 堺市大仙中町 大仙公園内 TEL.072-247-3670	9:30～17:00 (入園は16:30まで)	月曜日(祝日の場合は翌日) 祝日の翌日 (土・日曜の場合は開園) 年末年始	JR阪和線「百舌鳥(もず)」駅下車、徒歩10分	築山林泉廻遊式の庭園です。
28	さかいしりつぶんかかん **堺市立文化館** (与謝野晶子文芸館、アルフォンス・ミュシャ館) 〒590-0014 堺市田出井町1番2-200号 ベルマージュ堺弐番館2～4F TEL.072-222-5533	9:30～17:15 (入場は16:30まで)	月曜日・祝日の翌日 (土・日を除く。) 12月29日～1月5日 臨時休館日	JR阪和線「堺市」駅徒歩2分	堺出身で近代日本を代表する明星派の歌人、与謝野晶子と、『明星』の装幀やさし絵に影響を与えたアール・ヌーヴォーの中心的画家、アルフォンス・ミュシャの生涯と活動を紹介。 http://www.city.sakai.osaka.jp/arekone/place/place2.html
29	じてんしゃはくぶつかん **自転車博物館サイクルセンター** 〒590-0801 堺市大仙中町165-6 TEL.072-243-3196	10:00～16:30 (入館は16:00まで) レンタサイクル受付 10:00～15:00	月曜日(祝日の場合は翌日) 年末年始、 祝祭日の翌日	JR阪和線「百舌鳥」駅下車、徒歩13分、りんかんサンライン「堺東」より南海バス「大仙町」	堺の歴史や自転車のメカニズム、自転車の始祖ドライジーネなど歴史的な自転車を展示。クラシック自転車の体験試乗も可。レンタサイクル10台あり。 http://www.h4.dion.ne.jp/~bikemuse
30	こたにじょうきょうどかん **小谷城郷土館** 〒590-0106 堺市豊田1602 TEL.072-296-8435	10:00～16:00	月曜日・祝日の翌日 8月5日～20日 12月25日～1月8日	泉北高速鉄道「泉ヶ丘」駅下車、徒歩20分 北側②のりば12路線「若竹大橋」下車5分	昔の道具(農具・漁具)、台所用品、考古学資料(須恵器・古瓦)、江戸時代の火縄銃を中心とする江戸時代の工芸品等。
31	おおさかふりつやよいぶんかはくぶつかん **大阪府立弥生文化博物館** 〒594-0083 和泉市池上町443 TEL.0725-46-2162	10:00～17:00 (入館は16:30まで)	月曜日(祝・休日の場合は翌日) 12月28日～1月4日	JR阪和線「信太山(しのだやま)」駅下車徒歩7分、南海本線「松ノ浜」駅下車徒歩20分。国道26号線池上町交差点すぐ	弥生文化についてのわかりやすい展示。貴重な実物の考古資料のほか、模型・レプリカ・映像資料なども多数ご覧になれます。 http://www.kanku-city.or.jp/yayoi/
32	いずみしくほそうきねんびじゅつかん **和泉市久保惣記念美術館** 〒594-1156 和泉市内田町3-6-12 TEL.0725-54-0001	10:00～17:00 (入館は16:30まで)	月曜日 (月曜日が祭日の場合翌火曜日) 年末・年始・陳列替期間	泉北高速鉄道「和泉中央」駅下車南海バス①「春木川」「若樫」行②「松尾寺」「美術館前」行(約10分)乗車。「美術館前」下車すぐ	国宝、重文を含む日本と中国の美術品約3500点を収蔵し、年6～7回の展覧会を開催。中国工芸品やモネ、ルノワールなどの西洋絵画を常設展示する。日本庭園や茶室を散策しながら名品と出会える美術館 http://www.lkm-unet.ocn.ne.jp
33	とんだばやししじゅうようぶんかざいきゅうすぎやまけじゅうたく **富田林市重要文化財旧杉山家住宅** 〒584-0033 富田林市富田林町14-31 TEL.0721-23-6117	10:00～17:00(4～10月) 10:00～16:00(11～3月) (入館は閉館30分前まで)	月曜日 (祝日等の休日にあたる場合は翌日) 12月28日～1月6日	近畿日本鉄道長野線「富田林」駅南口下車 本町通り南へ徒歩10分	杉山家住宅内部。解体修理時の瓦、鎮札、江戸時代見取り図及び、当家出身歌人の石上露子の遺品。織田作之助の遺品(晩年に本市に居住していた。) http://www.city.tondabayashi.osaka.jp/
34	おおさかふりつはなぶんかえん **大阪府立花の文化園** 〒586-0036 河内長野市高向2292-1 TEL.0721-63-8739	9:00～17:00 (入園は16:00まで)	月曜日(祝日の場合は翌日) 12月28日～1月4日	南海高野線または近鉄長野線「河内長野」駅下車駅前バスターミナル7番のりばよりバス「上高向」停留所下車、徒歩15分	熱帯花木や洋ランが、年中楽しめる大温室。四季折々の花が咲き乱れる大花壇。ぼたん園やバラ園などみどころいっぱい。 http://www.osaka-midori.jp/fululu
35	やおしりつれきしみんぞくしりょうかん **八尾市立歴史民俗資料館** 〒581-0862 八尾市千塚3-180-1 TEL.0729-41-3601	9:00～17:00 (入館は16:30まで)	火曜日(祝日の場合は開館) 祝日の翌日 (但、その日が土、日、休日の場合は除く) 12月29日～1月5日	近鉄大阪線「河内山本」駅にて近鉄信貴線乗り換え、「服部川」駅下車、徒歩8分	常設展では「八尾の歴史と文化財」に関する考古・歴史・民俗資料を展示。その他、企画展を年2～3回と秋に特別展を開催。河内木綿体験コーナーもある。
36	ひがしおおさかしりつきょうどはくぶつかん **東大阪市立郷土博物館** 〒579-8052 東大阪市上四条町18-12 TEL.0729-84-6341	9:30～16:30 (入館は16:00まで)	月曜日、祝日の翌日、振替休日 12月29日～1月6日、展示替期間	近鉄奈良線「瓢箪山」駅下車、東南へ徒歩20分	市内の考古資料と民俗資料を中心に展示しており、常設展示「かわちのくに」を軸として特別展示と企画展示をそれぞれ年1回開催しています。
37	しばりょうたろうきねんかん **司馬遼太郎記念館** 〒577-0803 東大阪市下小阪3-11-18 TEL.06-6726-3860	10:00～17:00 (入館受付は16:30まで)	月曜日 (祝日・振替休日の場合は翌日が休館) 9月1日～10日 12月28日～1月4日	近鉄奈良線「河内小阪駅」下車、徒歩約12分 近鉄奈良線「八戸ノ里駅」下車、徒歩約8分	雑木林の庭に面した書斎。想像空間を表す高さ11mの大書架には壁面一杯に2万余冊の蔵書を展示。小ホールでは映像により司馬遼太郎を紹介。訪れる人に何かを感じさせる空間。建築家安藤忠雄氏の設計。 http://www.shibazaidan.or.jp
38	おおさかふりつちかあすかはくぶつかん **大阪府立近つ飛鳥博物館** 〒585-0001 南河内郡河南町 大字東山299 TEL.0721-93-8321	10:00～17:00 (入館は16:30まで)	月曜日(祝・休日の場合は翌日) 12月28日～1月4日	近鉄長野線「喜志」駅下車、喜志駅より金剛バス阪南ネオポリス行き終点下車、徒歩10分	「日本古代国家の形成過程と国際交流をさぐる」をメインテーマとする歴史博物館。150分の1の仁徳陵古墳復原模型や修羅を展示。建築家安藤忠雄氏の設計。 http://www.mediajoy.com/chikatsu/